

国際基督教大学における日本語教育 —— 一日本語教師の立場から ——

中 村 妙 子

要 旨

国際基督教大学（ICU）の日本語教育を一人の日本語教師の立場から振り返る。ICUの日本語教育を振り返るにあたっては、1. コースのカリキュラム及び教授法、2. 使われた教科書、教材リストアップ、3. 人的組織、4. 全体的な日本語教育の流れ、5. ICUにおける日本語教育に対する関心、6. 学生による評価などの点から考察できるであろう。それぞれの項目については資料、考証、関係者の聞き取りが必要であるが、小稿では、これらの項目について、現時点で触れられるものについて述べる。さらに、JLPに関することを点描的にふれる。

キーワード：ICUの日本語教育、JLP、カリキュラム、組織

I. はじめに

国際基督教大学（ICU）の日本語教育は1953年に始まった。筆者は1960年から、この日本語教育にかかわった者として、ICUにおける日本語教育を見てみたい。一つの機関の教育の流れを見るのであるから、資料の收拾、緻密な構成、正確な考証、関係者からの聞き取りなどが必要である。筆者がこの小稿を書き始めた時には、時間的な余裕がなく、ICUの最後の仕事をしながらでは力不足で、十分な資料を整えられなかった。2002年3月末の退職を機に、資料を整え、時間的な余裕の中で、体系的にICUの日本語教育についてまとめたいと考えている。

小稿はその前哨として点描的に述べ、ICUの日本語教育の一部が記されればと願う。筆者の立場は副題にあるように、一人の日本語教師として見たものである。別な立場から見れば、違った解釈がなされるであろう。一個人の限られた立場から見たものであるし、また、それしか出来得ないだろうと考える。今回は厳密に資料に当たらず、筆者の記憶によるので、思い違いもあるであろうが、お許しをいただきたい。また、共に働いた方々のお名前も出てくるが、失礼なことがあれば、ご寛容をお願いしたい。

II. 構 成

ICUの日本語教育の目的は、日本語を履修後には、大学において日本語で行われる授業を履修出来る日本語能力を養成するものである。だから、Japanese for academic purposeであり、アカデミックな用途のための日本語である。

ICUの日本語教育について考察するには、以下の項目について検討しなければならないであろう。

1. コースのカリキュラム及び教授法
2. 使われた教科書、教材のリストアップ
3. 人的組織
4. 全体的な日本語教育の流れ
5. ICUにおける日本語教育に対する関心
6. 学生による評価

次に、上記の各項目について、なぜ必要なのか、現時点で考えられることを述べてみる。

1. コースのカリキュラム及び教授法

ICU教養学部の日本語教育は日本語教育プログラム、または、1999年4月からは日本語教育課程と称されているが、略称のJLPが一番呼び慣わされている呼称である。日本語教育プログラムの呼称も英語教育プログラムの呼称ELPができあがって、平衡性を持つためにできたもので、それ以前は、日本語とか日本語教育とか呼ばれていたように記憶する。この小稿では、呼び方をJLPとする。このJLPにどんなコースがあったのか。各コースは週何時間の授業があり、話し、聞き、読み、書きなどの4技能の授業がどのような構成であったのだろうか。学生数及び教員数、そして、教員については専任教員と非常勤教員がどのような割合であったかを取り上げなければならないだろう。

教授法については、どんな教授法が用いられていたのか。また、プログラム全体で同じ教授法が理解され授業において用いられていたのだろうか。この点に関しては検証しにくい重要なポイントであろう。

2. 使われた教科書、教材のリストアップ

教科書を教えるのではなく教科書で教えるというのは、よく言われていることである。この意味は教科書はいらぬということではなく、何の教科書を使用しているかは重要である。一つのプログラムとして、多人数でチームを組んで教えていくうえでは、羅針盤として必要なものである。ICUにおいて、各時代、各コースにおいてどの教科書が使われたのかりストアップするのは意味があるであろう。中級レベルまでと考えると、教科書の種類はいくつにもなり、市販の教科書が多く出版されるにつれ、ICUで使用されている教科書の状況は把握しにくくなっている。さらに、学生のニーズということが主要な教授項目になってくると、副教材の使用が多くなり、さらに、把握がむずかしい。また、上級レベルは日本人と同じ言語使用環境での日本語運用を目指すため、日本人の読む本、雑誌、新

聞、テレビ番組などを使用する。これらをたどるのは教科書としてまとまっていないだけになお至難な仕事であろう。

3. 人的組織

教員の人的組織がどのようなものであったのかは、プログラムの歴史を見るうえで大切な要素である。1999年4月より組織変更し日本語教育課程ができてから、JLP専任教員とJLP兼任教員に分けられた。JLP専任教員はJLPの授業を担当する。JLP兼任教員はJLPの授業と専門教育の授業及び通常ICU教員に求められる論文指導、大学院、委員会、アドバイザーなどの仕事を持っている。

さらに、非常勤教員が加わっている。日本の他機関も同じような状況であるが、2002年2月現在でも、JLPで出されている授業時間数の50%は非常勤教員が教えている。

日本語教育課程より以前、1984年に講師のポジションが増加されるまで、多数の一年契約の専任助手がいて、日本語を教えていた。非常勤教員についていえば、非常勤助手もいた。非常勤助手はもちろん、コースの責任を持つものではなく、コースヘッドとよばれる、コースの責任者のもとで教える。非常勤助手については、修士後期課程の大学院生などにとっては、日本語教育の経験を得るうえで貴重なものであるが、だれがその指導にあたるのか、明確にしなければチームとなる教員にとっては、負担感のみ感じるものとなる。JLP全体で、若く、有能な日本語教師を育てようという意志がなければ困難である。

1999年4月からの語学教育課程は、いわゆる、講師問題（注1）の一つの解決策として、語学科から語学担当部門が分離し、教養学部部長のもとに統括されることになった。これにより、小回りが効き、意志決定が早く円滑になったのではないだろうか。また、兼任教員にとっては自分の専門領域に関して興味を集中させやすく、語学科自体は専門分野に関するカリキュラムに集中して考え、充実させることができるようになったと思う。

4. 全体的な日本語教育の流れ

ICUの日本語教育の流れを見るときに、全体的な日本語教育の流れと無縁ではない。戦後の日本語教育の流れを見るだけでも大きな仕事である。大まかに考えても、直接法、オーディオリンガル全盛から、コミュニカティブへと変遷している。この日本語教育の流れを見るときは、教育思想、教育方法の全体的な変遷を追わなければならない。

また、社会との接点では、日本語教育がなぜ盛んになってきたのか。また、その趨勢はどのように変化していくのかも考察しなければならないだろう。

5. ICUにおける日本語教育への関心

開学の理念の一つとして、国際性を一つの柱にしているICUは英語と日本語のバイリン

ガルを目指した。開学の1953年より、留学生のために日本語教育は始められた。日本語教育の必要性は理解されていても、ICUにおける日本語教育の認知度は低く、また、それに関連して人員が配分されるには、長い時間がかかった。今も充分ではない。ICUでの日本語教育の認知は、日本の中での日本語教育の認知と連動している。日本の大学で日本語教師養成課程が多くでき、日本語教育を学んだ人材が多数輩出されてくる。また、大学教員として比較的多くの人員が就職するため、日本語教師志望者も増えてきた。日本語教師の職業が認められてくるにしたがって、ICUにおいてもその地位が認められてきたといえるだろう。

一つの例として、ICUにおいては日本語教育では非常勤講師は要らないということがいわれていた。非常勤講師は本務校がある者となると、JLPで求める週、少なくとも4コマ、時には10コマぐらいまで教える非常勤教員は得られない。筆者の記憶では、1985年ぐらいまで、JLPで非常勤講師は認められなかったと思う。専任助手の少数2～3人が、専任助手と非常勤講師の二つの職階をかねたことは1985年より以前はあった。

現在では、基本的に非常勤教員は非常勤講師にのみ授業担当を依頼することになり、時代の流れ、ICUにおける日本語教育の認知の度合いの高くなったことを感じる。

6. 学生による評価

JLPでは少なくとも、30年以上前から、学生によるコース、教材、教員に対する評価を学期ごとに書いてもらっていた。評価を書くことについては、学生からは、何度要望を書いても、変更されないというコメントが出たり、教員は評価は有益なものがあるが、時には学生からの名指しの厳しいコメントには力を落としたりすることもあった。現在、ICUでFaculty Developmentとして、授業効果評価が、教授会で承認され実行されつつあるが、JLPの歴史を顧みるときに、今まで蓄積されてきた学生の評価をぜひ加えたいものである。

7. 筆者の略歴

筆者のICUでの略歴は、ICUで筆者がどのような立場で日本語教育を見たか知るうえで役立つであろう。

1959年3月 国際基督教大学教養学部（英語学科）卒業

1960年－1962年 ICU英語学科日本語、専任助手

1962年4月 ICU大学院教育研究科入学

1965年3月 同上修了

（この大学院時代も非常勤助手として日本語教育に携わった。）

1965年－1982年 ICU語学科日本語、専任助手

1982年－1984年	ICU語学科、講師
1984年－1990年	ICU語学科、助教授
1990年－1994年	ICU語学科、準教授
1994年－現在	ICU語学科、教授
1998年4月－現在	ICU大学院比較文化研究科前期課程
2000年4月－現在	ICU大学院比較文科研究科後期課程
1989年4月－1990年3月	特別研究期間
1994年4月－1995年3月	特別研究期間
1998年9月－1999年8月	特別研究期間

1991年4月からいくどか日本語教育プログラムの主任と副主任を努めた。この職責により、他学科の教員と接することとなり、JLPをICUという、もう一つ大きな場で見ると見聞を与えられた。

Ⅲ. 日本語教育の点描

ここまで、簡略にICU日本語教育の流れを見るときに考察しなければならないポイントについて述べてみた。ここからは、いくつかの筆者にとって印象深い出来事、あるいは、JLPにとって大事であったろうことを述べてみる。

1. 最初の授業

筆者が最初に担当したのは確か、“Substitution Table”を教科書として使用して教える授業であった。当時、東京日本語学校の長沼直兄『標準日本語読本』を使用していた。その教材の一つである。その課の文型を押さえた英語の文を口頭で与え、それにあたる日本語の文を言わせるものであった。オーデイオリソナルの時代で、口頭で文が言えれば言語を習得したものとするものであるから、それなりに一生懸命に英語の文を言っただけで、学生が正しい日本語を発話してくれると、うれしく思ったものだった。

2. 初級話し方クラス

初級の話し方の授業では、筆者が教えはじめた1960年から1987年まで、集中日本語教育では、その課の学習項目の文型の入った10行程度の会話を次の日までに覚えてくるという課題があった。話し方のクラスでは、学生は覚えてきた会話をreciteし、アクセントを含め、音声、文法の正確さをチェックされた。テープレコーダーで録音し、再生しながら直していくものである。評価表はPronunciation、Accuracy、Fluencyと三つに分かれていて、学生の間違いを書き出すものであった。JLPの話し方授業における最初的评价表であ

る。発音を一つ間違えると-0.5などと決まっっていて、学生はアクセントを含め、正確な発話をするのが求められた。学生から間違っていなかったと反論されたりして、攻防に激しいものがあった。この方法は、言語はコミュニケーションであるという言語観の普及により、80年代にはその厳しさもゆるやかなものとなっていった。1990年代の授業にはとりいれられていない。

筆者が1955年にICUに入学したころの英語教育もこのかたちであった。毎日、課題の会話を覚えてきて、recitationといわれる授業でそれを recite し、テープレコーダーに録音し、再生しながら間違いを直されるものであった。「Pronunciation」という授業があり、英語の母音からはじまって、子音にいたるまで正確に発音するように指導された。鏡を使いながら自分の舌の位置、口の形を確認しながらの語学教育は、その時代には、目新しくそこまで徹底しているものは少なかった。また、テープレコーダーの普及がこれらの授業活動を活発にさせたのであろう。

3. Comprehension Class

集中日本語教育の中であるが、Comprehension という時間がある。この授業は教科書のいわゆる、本文を読み、その内容に関する話し方、作文などの授業のコンテンツを与えるものである。また、漢字、文法、表現もこの本文から学ぶ。

この Comprehension クラスの理解のために、学生はクラスに来る前に本文のモデルテープを聞いて読み方の練習をし、分からない所を見つけて、このクラスに臨む。さらに、その本文の漢字と文法事項、特に文型に関するものを漢字、Structure と呼ばれるクラスで先立って学ぶ。筆者が最初に見学したクラスは、須藤信子先生の Comprehension の授業であった。新出の文型、分かりにくい文章構造を説明しながら、こともなく読み進んでいった。芥川竜之介の「くもの糸」だったかもしれない。

しかし、筆者はこのクラスを担当したとき、また、他の教員も同じであったと思うが、1日に1500字～1600字の本文を読むのはかなりの作業だった。カバーしきれなくて、重い足を引きづる思いで研究室に戻った。また、ベテランの教員がこのクラスを担当するのが慣習だったように思う。しかしながら、最近では中級教科書も原文をそのまま採用するのではなく、初級から中級の渡りには、書き下ろし、あるいは、元に資料があって書き直した文章を使用する。読む分量は、多く読むというよりは、消化できる分量になっている。読むこともグループで読ませ、分からないことを学生同士で解決させ、お互いに読んだ内容を発表して、確認するなど学生参加の双方向性の授業となっている。理解すること、読むこと、言語観の解釈の変化が、教室の読みの作業に大きく影響している。

4. 教科書作り

先に述べたが、JLPの中で教科書が何であるかはいつも問題である。次のようなことが思い出される。1963年に“Modern Japanese for University Students Part I”の初版がでた。この教科書作りに先立ち、まず、語彙調査から始まった。コンピュータを使った、大規模な語彙調査資料がなかった時代、自分たちで語彙調査を行った。土曜日の午前中に本館3階南側の研究室に全員が集まり行った。筆者は小さなカードに新聞の切りぬきを貼ったものに、単位切りをしていく作業を担当した。それを、どのように集計し、分析して教科書に反映させたか、駆け出しであった筆者にはよく分かっていない。

教科書を作っているときは、授業をしながらの作成で、次の日の課ができてくるのを待つという状態であった。筆者はいくどか、東林荘に住んでいらした、コミュニケーション担当のCabbage 教授夫妻の所へ英語のチェックの原稿を持って行った。どの教科書を作るときもそうだが、教科書作りにおいてはみんな懸命であったし、緊張感をともなうものであった。

また、当時は、かなや漢字は非漢字圏の人々には無理である、という言語学者の先生方の意見で、40課からなるこの教科書は20課までは、漢字、読み方以外は全部ローマ字表記である。当時の日本語に対する考え方を表していて興味深い。

その後、“Modern Japanese for University Students Part II, Part III”と作成したが、これは編集委員会を作って作成していった。日本語修了後は日本語で行われる授業を履修し卒業に必要な単位を取っていくわけである。一般教育の授業は必修の課目であるから、各分野の先生方に読んでおくとよい、あるいは、その分野の基本的な語彙を含む本を紹介してもらい、それを教材に編集していった。話題、一般教育で必要な語彙をカバーしたもの、大学生活で必要とされるであろう表現、知的要素のあるものということで、選択にはそんなに困難を感じなかった。読み物が決まれば、原物のものを読ませるという方針であるから、表記に少し手を加え、その次には関連教材を作っていった。

教員がお手上げだった課もあった。矢野健太郎『相対性理論』（注2）で、「光速不変の法則」「時計の遅延現象」「ローレンツ収縮」などが含まれていた。物理学教室に行って、説明を受けて、授業に臨んでも、説明しているうちに分からなくなった。よくしたもので、学生の中に物理学の分かる学生がいて、説明をしてもらい切りぬけたこともあった。この教科書シリーズもこの課を省きはじめ、だんだんと学生の興味にあわないものを他の教材と入れ替えていくことが行われ、最後には数課だけ残されていく状況になってきた。4年本科生よりも1年みのOYR(one year abroad)の学生が増加したことも関連があるかもしれない。

“Japanese for College Students Basic”の作成については、八王子の大学セミナーハウスでの研修会でその骨組みを議論したことが筆者には印象深い。日本語教育研究センター

発足に絡み、だれが作るのかが明確でなく、改訂版を何回も重ね、長い年月がかかった。1996年10月に講談社インターナショナルから3冊の本として出版したことは、初級の土台を確定するのに大きく寄与した。

中級教材は初級教材の最終工程とおなじころ、1992年から1994年に日本私学振興財団、学術研究振興資金の援助を受けて中級班を作り、開発し試用版を作成してきた。しかし、いまだ確定できていない。改訂したり、教員の中級教材像をまとめたり、学生のニーズ調査などを行ってICUの中級教材を模索している。初級以上に教員の教育哲学がいろ濃く反映されやすい。良きにしろ、悪しきにしろ、強力なリーダーシップで、JLPの中級教材はこれであるというものが出来ないと、纏らないだろうと予測する。一日も早く出来上がり中級レベルの統一ができるのを期待する。

5. 紛争時代

1960年代は「荒れた60年代」と国際基督教大学同窓会編『卒業生のICU40年』（p.34）に記されている。筆者はこの時期ICUで日本語を教えていた。自身の大学院生時代と病院生活の繰り返しで、留学生に接しても、日本人学生に接することが少なく、日本人学生の動きには余り敏感ではなかった。また、駆け出しの日本語教師には、教材もそろっていない時代に、日々の授業の準備と授業に追われていた。

前掲の本に1967年2月10日未明本館が学生に占拠されたと述べられている。（p.37）筆者はこの朝を忘れもしない。西荻の自宅から、三鷹へ、そこからバスに揺られて朝の授業に駆け付けると、本館は封鎖され、垂れ幕が下がっていた。寒い朝で、雪も舞っていたように思う。助手で教授会に属していなかった筆者は、他の助手たちも同じだが、何が起こったのか分からず、とにかく、開いている図書館に集まった。それから、何回かの封鎖で授業はできなかった。確か、小出詞子先生はフルブライト奨学生として在米中だった。日本語の責任者は体調を崩し、入院中だったり、紛争解決に超多忙であった。それから何回かの封鎖、授業再開反対で授業はできなかった。

授業再開反対の時期だったと思うが、留学生のための授業を三箇所に分かれて行った。授業をしたのは全員助手であった。三鷹の竜源寺近くのバプテスト教会の牧師が学生にいたので、その教会が一箇所、高円寺駅近くの学生の下宿、渋谷の学生のアパートの一室の三箇所であった。教会は広い会堂だったので授業のためのスペースが確保できた。高円寺の学生の部屋は、畳の部屋一間で車座になって勉強した。渋谷へは筆者は行かなかったので部屋の様子など分かっていない。

この学外授業にたいして、学生から謝礼を払うという申し出があった。授業再開反対の時期は本館には入れた。日本語研究室のスタッフルームで、助手たちが、謝礼をもらうか、もらわないか、侃々諤々議論を交わし、結局もらわないで授業をするということになった。

学生との絆は強く、終わると学生たちの手料理で昼食をともにしたことはなつかしい。この学外授業の単位は大学側が認めるということだったが、結局、教えた教員が手紙を書いて勉強したことを証明した。また、授業を行っているところに、授業再開反対の人たちが来たらどう対応すればよいのかなど話しあったことも思いだされる。学生との間で、刻一刻、何が起きているのか、情報から遠かった助手たちが、一年に限定されて勉強しなければならない留学生に、少しでもかれらの目的をはたすことができればと考えて日本語を教えた日々だった。

その後も、理学館で学生が座り込んでいる中を通り抜けて教室に行く時も「学生を踏みつけて行くのか」と叫ばれ、辛いものがあった。理学館での授業は壁の上部が30センチぐらい開いているので、となりの部屋の声が聞こえ、語学学習には不向きだった。留学生の中にも座り込みに参加した学生があった。その学生は、後に研究職に進み、現在、日本の大学で、教鞭をとっていると聞くと、時の流れを感じる。

6. カリキュラム改編

インテンシブジャパニーズ、セミインテンシブ（後にジャパニーズ）、エレメンタリー・ジャパニーズ、上級日本語、スペシャル・ジャパニーズと複数のコースがあった。それらのカリキュラム、時間数は少しずつ変更してきた。1995年にカリキュラムを大きく変えた。1992年に出された資料により、JLPの各レベルの教授項目を会議で検討し、1995年に『日本語教育プログラム 初級・中級(I)・中級(II)・上級クラスシラバス』としてまとめた。長時間の議論を経て、このシラバスによりカリキュラムを改編した。中級コースのレベルを一つ増やした。また、それぞれのコースの時間数を減らし、コアとなる時間と、技能を伸ばす時間とを組合せた。

2000年9月にさらに、見直しをして、現在のカリキュラムとなった。現在のカリキュラムは、時間数においては、1995年のカリキュラム改変以前の時間数と同じである。また、中級のレベルの数も前にもどった。インテンシブジャパニーズのカバーする内容に変化があり、インテンシブIでは、初級3分の2をカバーすることとし、順番にII、IIIへと教授項目を送っていく。上級日本語は一つのレベルであったが、超級レベルの日本語を学びたい学生が増えたことから、上級日本語を二つのレベルに分けた。

長く続いていたカリキュラムだったので、カリキュラムを自分たちの手で改編できたことは意味があった。また、日本語教育研究センターとJLPの仕事の分担にも絡んで、この改編が考えられていた時期もあった。しかし、大学の学籍管理の面からいえば、同じ名前のコースがレベルが異なったり、進級する場合の連続性に欠けたり、個別に対応していかなければならないケースがいくつかあった。学生のニーズ、要望、教員の考えからカリキュラムを変えたが、組織の中のコースであることを意識しておかなければならない。

スペシャル・ジャパニーズについては、1997年9月にプログラムA、B、Cとして、9月に帰国学生全員がスタートするようにカリキュラムを改編した。各プログラムの到達度については、議論があり、2001年秋スペシャル・ジャパニーズ修了生にアンケート調査を実施したが、結果はアンケート回収が充分でなくはっきりしたものが見えていない。

7. 夏期日本語教育

ICUには、夏期に行われている日本語教育がある。サマープログラムから、サマーコースと名称が変わったが、長い歴史を持っている。このコースは日本語教育研究センターと関係があるが、センター設立については稲垣滋子「センター発足までの経緯と1990年度の活動報告」『ICU日本語教育研究センター紀要1』に詳しい。このセンターと日本語教育課程の二つの組織が、今後どのようなかたちで、ICUの日本語教育を担っていくのかは一つの課題である。

8. 施設、機器の発達

施設が充実し、語学教育に資することは望ましいことである。ICUにおいても、語学ラボができ、音声テープを使つての教育、モニター機能による学生の個人指導などが可能になった。ビデオカメラがラボに入った時には、漢字の筆順や字源を説明したビデオを各課に作成し使用した。ビデオの普及は聴解の授業にも大きく寄与した。

ワープロ、パソコンの導入で教材作成も大きく変わった。教員が自分の必要に応じて教材や試験問題が作成できる。ワープロが普及するまでは、須田ますみさんや岩田みよさんなど和文タイプを打ってくださる方のお世話になった。語学教育なのでテストの回数は多いが、テスト問題を打ってもらい、青い原紙を透かしながら、校正をしたのもなつかしい。

また、コピー機の機能の高度化によって、教材が飛躍的に作りやすくなった。コピー代、著作権の問題はあるが、市販の日本語教材も多数出版され、それを活用して、教室活動を豊かなものにしていくことが出来るようになった。

9. レクイエム

ICUの日本語教育にかかわったなかで、永遠の別れを告げた方が何人かいる。その中でも二人の学生のことを記しておきたい。二人の学生は日本で交通事故のために、尊い命を落とした。

一人はスコットさんといい、アメリカの方と記憶している。筆者は直接教えていないが、大人しい男子学生で、列車事故で亡くなられた。シーベリー礼拝堂で記念礼拝が行われた。

もう一人はワーリックさんといい、アメリカの方である。筆者は上級日本語の授業の時に出会った。真面目で、漢字もよく覚えていた。ICUの教育研究科に進学することになって

いた。尾須鷹の日航機事故の犠牲者である。日本航空に勤めていた筆者の友人に、スチュワーデスに英語を教える人を頼まれ、ワーリックさんを紹介した。大阪行きの飛行機に乗ったのはそのためだったのだろうか、胸が痛む。先年、京都で日本語教育学会が催された折り、午前中の空き時間に龍安寺にねむる、かれのお墓をたずねた。お寺でワーリックさんの話をすると、すぐ分かり、涅槃堂という位牌堂に案内された。生前、龍安寺を愛していたかれのために、この寺にまつたと聞いた。位牌堂には手帳があり、友人たちの言葉が綴られていた。筆者の前には、彼の検死を行った医師の言葉があった。「私たち夫婦も歳をとりました。もう二人でここに来られないでしょう。」というものであった。他国で夢半ばにして、散って行った、若人のことを考えると、胸がふさぐ。鎮魂歌を贈りたい。

ここまで、ICUの日本語教育が何をしてきたかについて書くとしたら、どのようなことが取り上げられるのであろうかを考えてみた。今回は、それを充分、肉づける余裕がなかった。後日、ICUの今後を示唆できるものを、時間をかけてまとめたい。

注

- 1 講師問題：1984年ごろに語学科に講師のポジションが増え、一年契約であった助手は講師の身分となり、「助手問題」は一応の解決を見た。しかしながら、次は講師の身分より上の職階がないという問題が起こり、「講師問題」となった。学長の諮問委員会組織委員会が作られ、検討を重ね、1999年4月より語学教育課程が発足した。
- 2 第4課 相対性理論 国際基督教大学語学科日本語教室編 “Modern Japanese for University Students Part II” 1966年

参考文献

- ICU日本語研究室編『あすの日本語教育の道を求めて』1987年
国際基督教大学同窓会編『卒業生のICU40年』1992年
国際基督教大学日本語教育研究センター『ICU日本語教育研究センター紀要1』1991年
武田清子『未来をきり拓く大学』2000年